

国語 模範解答

受験番号

氏名

--

1									
問 9				問 8	問 7	問 5	問 3	問 2	問 1
達	た	自	新	ウ	走	ウ	エ	A	a
を	め	分	は		り			ア	密集
楽	に	の	、		た				
し	練	た	朔		い				
ん	習	め	の		と				
で	に	で	た	ウ	い	問 6	問 4	B	b
い	つ	も	め		う			ア	軽快
た	き	あ	と		気	イ	ウ		
と	あ	っ	思		持				
気	っ	た	っ		ち				
づ	た	と	て				c	談笑	
い	つ	気	走						
た	も	づ	っ						
。	り	い	て						
	が	た	い						
	、	。	た						
	自	私	が						
	分	も	、						
	も	弟	実						
	上	の	は						

2										
問 8					問 6	問 5	問 3	問 2	問 1	
で	疲	生	た	筆	ア	ア・エ・オ・キ	ウ	A	a	
区	れ	じ	大	者				豊富	てんけい	
切	る	る	き	は						
り	の	と	さ	、						
、	で	考	の	動						
休	、	え	範	物	問 7		問 4	B		
憩	自	て	囲	に						
す	分	い	が	は	イ		ア	印象	b	せいやく
る	が	る	あ	体						
。	集	。	り	の						
	中	私	、	つ						
	し	も	極	く						
	て	長	端	り				貴重	C	
	続	時	に	や						
	け	間	な	生						
	ら	勉	る	活						
	れ	強	と	法						
	る	す	無	に						
	長	る	理	合						
	さ	と	が	っ						

吉祥寺湧水中学校 模擬入学試験問題 国語 解説資料

配点

大問	分野	配点
1	物語文	50点
2	論説文	50点
合計		100点

1 物語文『朔と新』（50点）

問1 各2点・計6点

「密集」は、多くの人や物が、すき間をあまりあけずに集まっていることです。スタート直後のランナーたちが集まり、走りにくくなっている場面にあてはまります。

「軽快」は、軽やかで、気持ちよく感じられる様子です。ここでは、会場に流れる音楽を表しています。同じ「けいかい」でも、危険などに注意する「警戒」ではありません。

「談笑」は、笑ったり、和やかに話したりすることです。大会のスタートを待つランナーたちの様子を表します。

問2 各2点・計4点

Aの「口角」は口の両端のことです。「口角をあげた」は、口元を上げて笑みを浮かべた様子を表しています。声をあげて笑ったことまでは書かれていないので、アが適切です。

Bの「察しがついていた」は、事情を考えて、だいたいの見当がついていたという意味です。朔は、新が陸上をやめた理由を梓に尋ねていますが、新が自分の失明に責任を感じ、大切な陸上を手放したのだろうと推測していました。人から理由をはっきり教えられたという意味ではないため、アが適切です。

問3 4点

空欄の前には、朔が時間とともに、視力に頼らない生活に慣れていく様子が書かれています。

「もしも」と事故の前を思うこともほとんどなくなり、新に会っても感情は揺れないだろうと思っていました。

ところが、新が陸上をやめたと知ると、落ち着いていたはずの気持ちが再び大きく揺れ、新への怒りがわき上がります。以前の苦しい気持ちに戻ったことを、時計の針が後戻りする「逆回転」にたとえているのです。

「加速」「減速」は進む速さの変化、「急停止」は動きが止まることなので、ここでの「以前の状態に戻る」という変化には合いません。

問4 4点

直後の「最初から間違った方向へ向かって駆け出していた」という言葉に注目します。朔は、新のために走るように見せながら、実際には新を苦しめようとしていた自分の思いから、目をそらしてきました。

このまま新を自分に縛りつけても、その先には後悔しかないと考えています。つまり、ここでの「ゴール」はレースの到着地点だけでなく、自分が何のために走り、何を目指すのかという目的を表しています。

アの「目が見えないから」、イの「新がいなければ到着できないから」、エの「走り切る自信がないから」という説明では、朔が自分の動機に向き合っている場面を捉えられません。

問5 6点

注にあるように、「欺瞞」は、人をあざむき、だますことです。この問題では、外から見える理由と、本当の理由との違いを捉えます。

朔は、新のためにもう一度走らせようとしているように見せていました。しかし、本心には陸上を捨てた新への怒りがありました。新を走らせて、走ることへの強い思いを呼び起こし、大切なものを失う苦しさを味わわせようとしていたのです。

「新を傷つけてやりたかった」「走ることへの渴望を煽ってやりたい」という部分が根拠になります。弟を思いやる行動のように見せながら、実は弟を苦しめようとしていたため、朔は「欺瞞」だと考えています。

アは本人の意思を確かめずに押しつけたこと、イは自分の競技を続けるために新を必要としたこと、エは事故前の兄弟関係に戻ろうとしたことを理由にしています。いずれも、朔が告白した本当の目的とはずれています。

問6 5点

直前には、二人で走っていても、だれかが代わりに走ってくれるわけではない、と書かれています。走る苦しさを引き受け、実際に足を動かすのは自分自身です。その意味では、走ることは「孤独」です。

一方で、新は、朔のためだと言い聞かせていた走りが、実は自分のためのものだったと気づきました。走るかどうか、何のために走るかを自分で選べるという意味で、「自由」でもあるのです。

アのように好きな道を選べることはありません。ウの「罪悪感をすべて忘れる」とまでは書かれておらず、エのように助けてもらえること自体を「自由」の理由にしているわけでもありません。

なお、「孤独」は、伴走者の助けや二人のつながりを否定する言葉ではありません。だれかと一緒にいても、自分の走りを代わってもらうことはできない、という点を表しています。

問7 5点

傍線の前で、新は「オレ、やっぱり走ることが好きだ」と言い、後では「オレ、走りたい」と言っています。前後の二つの発言から、見失っていたものは、自分自身の「走ることが好きだ」「走りたい」という気持ちだと分かります。

ここで「見えなくなってた」と言っているのは新です。目に見える景色のことではなく、事故への思いなどの中で、自分の気持ちが分からなくなっていたことを表しています。

別解例：走ることが好きな気持ち／走ることの楽しさ。 表現が違ってても、走ることへの自分自身の気持ちを捉えていれば、同じ趣旨の答えになります。

問8 6点

物語の途中で、朔は「ゴールが見えない」と考えていました。自分の負の感情から目をそらし、新とどこへ向かおうとしているのかを見失っていたのです。

その後、二人は本心を伝えます。新は、自分が走りたいから走るのだと気づき、「強くなって、また朔とも走る。走りたい」と伝えました。それを受けて、朔の心に、重たい雲を押し開いて青空が広がるような光景が浮かびます。

これは、実際に視力が戻ったという意味ではありません。二人で再び走る未来への希望が生まれ、朔が進む道を見だし始めたことを表していると読めます。

アの「罪悪感から解放された」とまで言い切ることはできません。イは新の言葉の一部には対応しますが、進む先を見失っていた朔に希望が開けるとい、場面全体の変化を十分には説明していません。エのように、自分の過去の行動を肯定し直したことが中心とも読めません。

問9 10点

模範解答（74字/80字以内）

新は、朔のためと思って走っていたが、実は自分のためでもあったと気づいた。私も弟のために練習につきあったつもりが、自分も上達を楽しんでいたと気づいた。

別解例（76字/80字以内）

新は、朔のためと思って走っていたが、実は自分のためでもあったと気づいた。私も友達のために勉強を教えたが、自分も理解が深まることを楽しんでいたと気づいた。

本文の捉え直しは、「朔のために走っていると思っていた」から、「実は自分が走りたくて、自分のためにも走っていた」への変化です。新は、行動そのものだけでなく、その行動を選んだ自分の気持ちを見直しています。

経験を書くときも、だれのためだと思って何をしたのかと、その中にどのような自分自身の喜びや願いがあったのかを示します。模範解答では、弟の練習につきあうことが、実は自分の上達を楽しむことでもあったと気づいています。

大切なのは、出来事を本文と同じにすることではなく、考えの変化を対応させることです。 走る話や兄弟の話である必要はありません。友達への手助け、家での手伝いなどでも、同じような気づきを説明できます。

「自分のためでもあった」は、相手を思う気持ちがすべてうそだったという意味にする必要はありません。相手のためという思いと、自分も楽しい、やってみたいという思いの両方があった、という経験も対応します。

「人を助けて楽しかった」とだけ書くと、初めはどう考えていて、その見方がどう変わったのかが伝わりにくくなります。本文の説明と経験を合わせて、80字以内にまとめましょう。

A 本文の内容理解 4点

要素	内容	配点
①	新が、それまでは朔のために走っていると思っていたことを示している。	2点
②	実は自分が走りたくて、自分のためにも走っていたと気づいたことを示している。	2点

B 経験との対比 6点

要素	内容	配点
①	自分または身近な人が、だれかのためだと思っていたことを具体的に示している。	3点
②	その行動に、自分または身近な人の喜び・願い・やりたい気持ちなどがあったことを示している。	3点

上記内容にあてはまる答案に、各要素ごとの配点を合算した得点を与えます。

Bについて、経験の立派さ・珍しさ、個人的な事情の深い開示を評価するものではありません。自分自身の経験か身近な人の経験かどうかによっても評価は変わらず、上記の基準に沿って点を与えます。なお、「自分のため」は利己的な動機に限らず、「自分も楽しかった」「自分もやりたかった」なども含みます。

2

論説文『ゾウの時間 ネズミの時間』（50点）

問1 各2点・計4点

「典型」は、ある特徴をよく表している、代表的な例のことです。本文では、島に住むことで大きさが変わった動物の代表的な例として、ゾウが挙げられています。

「制約」は、自由に行動したり変化したりすることを制限する条件のことです。ここでは、捕食者に食べられないようにしなければならない、という条件を指しています。

問2 各2点・計6点

「豊富」は、量や種類がたくさんあることです。ここでは、化石が多く残っていることを表しています。

「印象」は、見たり聞いたりしたときに心に残る感じのことです。「印象的」は、特に強く心に残る様子を表します。島のゾウが小さくなった例の驚きを伝える言葉です。

「貴重」は、とても大切に、価値があることです。本文では、失われかねないものとして筆者が捉える動物たちに使っています。行動や考えのもととなる調子を表す「基調」ではありません。

問3 4点

空欄の前後の「突然変異により新しい種を生み出す可能性を犠牲にしている」「進化の袋小路」が手がかりです。「袋小路」は、行き止まりになっていて、その先に進めない道をいいます。ここでは、体のあり方が特定の方向にかたより、新しい変化の可能性が狭まっていることにたとえています。

筆者は、非常に大きな体をもつことを、普通とは異なる特別な体のあり方になっていることと捉えています。そのため、「特殊」化が当てはまります。

アの「高度」化は程度が高くなること、イの「巨大」化は大きくなること、エの「一般」化は広く共通するものになることです。この文で、進化の可能性が狭まるという説明につながるのは「特殊」化です。

問4 6点

傍線の前には、島は大陸より食物が少なく、面積も狭いので、動物は小さくなっていくのだろう、という考えが示されています。

ところが、後では、ネズミやウサギのような小さい動物は、島では逆に大きくなると説明されています。つまり、「島では食物が少ないから、どの動物も小さくなる」とは説明できないのです。

イ・エの「大きさは変わらない」は本文と異なります。ウ・エの「島は環境に恵まれているので、みな大きくなると思いがちだ」という前提も、傍線の前に書かれた考えと合いません。

問5 8点

本文に書かれているかどうかだけでなく、それが「無理」や「犠牲」に当たるかを確認めます。大きいゾウについての不都合と、小さいネズミについての不都合を分けて読むと整理できます。

選択肢	本文との対応・判断	正誤
ア	ゾウの重い体を支えるため、骨格に無理がかかる。	○
イ	「島の規則」の説明であり、無理や犠牲そのものではない。	×
ウ	捕食者に食われにくいことは、大きいことの利点である。	×
エ	ゾウは一世代の時間が長く、新しい種を生む可能性が小さくなると説明されている。	○
オ	ネズミは餌を食べ続ける必要があり、餌が見つからないとすぐ飢える危険がある。	○
カ	水を飲む順番をあけてもらえることは、大きいことの利点として挙げられている。	×
キ	心臓が速く打ち続けることが、心臓や血管の負担になるかもしれないと述べられている。	○
ク	島の環境の特徴であり、体の大きさに伴う無理や犠牲ではない。	×

特にウ・カは、本文にはありますが、「不都合」ではなく「利点」です。設問が何を選ぶよう求めているかに注意しましょう。

正答ごとに2点、誤答ごとに-2点。ただし最低0点とし、未選択は加減点しません。

問6 6点

筆者の説明は、「島が狭く、草の量が限られる」→「生きていける草食獣の数も限られる」→「肉食獣を養うだけの草食獣がいらない」→「肉食獣が餌不足になる」という順につながっています。

本文では、一匹の肉食獣を養うのに百匹近くの草食獣が必要だとしても、島の草が十匹ほどしか養えなければ、草食獣は生きられても肉食獣は生きられない、という例で説明しています。この食物のつながりを捉えているアが正解です。

イは、草食獣が先にいなくなるとしており、本文の説明と逆です。ウの「草食獣を見つけにくい」、エの「肉食獣が渡ってこられない」という理由は、この箇所では説明されていません。数字は本文の説明用の例であり、暗記することが問われているわけではありません。

問7 6点

筆者は、ゾウは大きければ捕食者に食べられにくく、ネズミは小さければ物陰に隠れて捕食者の目を逃れられる、と説明しています。

大きくなることと小さくなることは反対ですが、どちらも「捕食者に食べられる危険を少なくする」という点で共通しています。

アの食物の奪い合いは、この共通理由としては挙げられていません。ウの体の負担については、むしろ大きすぎることに小きすぎることに無理があると述べられています。エの新しい種の生まれやすさも共通理由ではなく、ゾウについては、その可能性を犠牲にしているという説明があります。

問8 10点

模範解答（90字/90字以内）

筆者は、動物には体のつくりや生活法に合った大きさの範囲があり、極端になると無理が生じると考えている。私も長時間勉強すると疲れるので、自分が集中して続けられる長さで区切り、休憩する。

別解例（80字/90字以内）

動物には体のつくりや生活法に合う大きさの範囲があり、極端な大きさには無理が生じる。靴も、大きすぎると脱げやすく、小さすぎると足が痛むので、足に合う大きさがよい。

最後の段落に注目します。筆者は、動物には体のつくりや生活法から生じる制約があり、体の大きさをむやみに変えられるわけではない、と考えています。そのうえで、一定の「適正範囲」があり、その両端のような極端な大きさには何らかの無理がかかると述べています。

したがって、前半では、「体のつくりや生活法に応じた大きさの範囲があること」と、「極端な大きさには無理が生じること」の二つを説明します。動物の種類に関係なく、全員が同じ大きさになるのがよい、という考えではありません。

後半では、その考えが身近な場面にもあてはまることを示します。勉強の例では、「長時間続けると疲れること」が無理や負担に、「自分が集中して続けられる長さ」が適した範囲に対応します。靴の例では、大きすぎても小さすぎても不都合があり、足に合う大きさがあることを示しています。

ただ「ほどほどがよい」と書くのではなく、何に合う範囲なのか、極端になるとどのような不都合があるのかを具体的に説明しましょう。 設問は生活や身の回りの例を求めているため、物の大きさだけでなく、勉強の時間のような例でも、考えとの対応が明確なら成り立ちます。

本文の説明では両端・極端な大きさに触れますが、身近な例で必ず大きすぎる場合と小さすぎる場合の両方を書く必要はありません。例は一つにしぼり、本文の考えとのつながりを90字以内で示します。

A 本文の内容理解 4点

要素	内容	配点
①	動物には体のつくりや生活法に応じた、適した大きさの範囲があることを説明している。	2点
②	両端のような極端な大きさには、無理や負担が生じることを説明している。	2点

B 生活や身の回りの例 6点

要素	内容	配点
①	自分の生活や身の回りから、考えがあてはまる具体例を一つ挙げている。	3点
②	その例では、何に応じた、どのような範囲が適しているのかを示している。	3点

上記内容にあてはまる答案に、各要素ごとの配点を合算した得点を与えます。